

第四章 事業に失敗せし時

基督教は人を眞面目になすものなり、青年之によりて已に老成人の思想あり、少女之に由て已に老嫗らうおんの注意あり、それは基督教は物の實を求めしめてその影を輕ぜしむるものなればなり、小説の玩讀芝居の見物は變じて歴史の攻究社會の觀察となり、野望的高名心は變じて沈着なる事業の計畫となり、自己尊大の念は公益増進の希望と變じ、「如何にして斯國と斯神つかとに事えんか」との問題について日も夜も沈思するに至る。

“ When I was yet a child, no childish play

To me was pleasing; all my mind was set

Serious to learn and know, and thence to do

What might be public good; myself I thought

Born to that end.” — Milton, Paradise Regained.

宗教にして事業心を喚起せしむるものは基督教なり、事業と宗教とは自ら其性質を異にするものなりとの觀念は普通人間の抱懷する所なり、事業とは活潑なる運動を意味するものにして、宗教とは清肅隱遁を云ふものたるが如し、余輩未だ佛教の熱心家にして教理の爲めに大事業を企てし人あるを聞かず、釋氏の理想上の人物は決して事業家にはあらざりしなり、然れども基督教の特徴として世の事業を重ずるのみならず之を信ずるものをして能く大事業家たるの聖望を起さしむ、カーライルの所謂 peasant-saint (農聖人)、即ち手に鋤を取りながら心に

宇宙の大眞理を貯ふる人、是基督の理想的人物にして、基督彼自身も亦僻村ナザレの一小工なりし。

余も基督信徒となりしより芝居も寄席も競馬も弄花も悉く舊來の玩味を去り、獨り事業てふ念は頻に胸中に勃興して殆んど禁ずる能はざるに至れり、或は蘇のリビングストンを學び、「利慾の爲めに商人の通過し得る處何ぞ基督の愛に勵まざるゝ宣教師の通過し得ざるの理あらんや」と云ひつゝ亞弗利加大陸を横斷せしに倣ひ、我も又新宗教の感動の下に南洋又は北海無人の邦土を探索せんか、或は獨のシュワーツ(Christian Friedrich Schwartz)を學び、未開國の教導師となり、仁愛の基礎の上にその國是を定めん乎、或は英のウキリヤム、ペンを學び、荒蕪を開き蠻民と和し、純然たる君子國を深森廣野の中に建立せん乎、或は米のビーボデーを學び、貧より起て百萬の富を積み、孤を養ひ寡を慰め、大慈善の功績を擧げん乎、休言、基督教に世の快樂なしと、其希望此計畫——嗚呼實に余は余の生涯の短きを歎ぜり、事業、事業、國の爲めの事業、神の爲めの事業、——嗚呼世に快と稱するものゝ中何物かこの快樂に勝るものあらんや。

余は曾て思へらく、自己の爲に富貴たらんことを祈るは罪なり、神必ず如斯祈禱は受け賜はざるべしと、名譽を得んが爲の祈禱も又然り、然れども他を益せんが爲めに祈る事は神の最も悦び賜ふ所にして、かゝる祈禱は必ず聽かれ、余の事業は必ず成功に至らんと、依て萬事を打捨てゝ余の神聖なる希望を充たさん事を勉めたり、勿論基督信徒として余は世に媚び高貴に諂り以て余の目的を達すべきにあらず、余の頼むべきは神なり、正義なり、「或は車を頼み或は馬を頼みとする者あり、されど我等はわが神エホバの名をととなへん」(詩篇二十篇七)。

此時こそ實に余に取りては最も多望なる最も愉快なる時なりき、余の前途妨害なるものなく、余の心中に失敗

maid)にあらざるなり、教會も學校も政事も殖産も正義を學び之に達する爲めの道具なり、現世に於ける事業の目的は事業其物の爲めにあらずして是に従事するものゝ之に由て得る經驗鍛鍊堪忍愛心にあるなり、基督教は事業よりも精神を尊ぶものなり、そは精神は死後永遠迄存するものにして事業は現世と共に消滅するものなればなり、支那宣教師某四十年間傳道に従事し一人の信徒を得ず、然れども喜悅以て今世を逝されり、彼は得し處なかりしや、否いな、師父ザビエーは東洋に於て百萬人以上に洗禮を施したりと雖も恐くは現世より得し眞結果に於ては此無名の一宣教師に及ばざりしならん、嗚呼事業よ、事業よ幾干の偽善と卑劣手段と嫉妬と争とは汝の名に依て惹起されしや。

嗚呼然るか、然らば余の失敗せしは必しも余の罪にあらず、又神の余を見捨賜ひし證據にあらず、又余の奮勵祈禱の無益なるを示すにあらざるなり、然り若し正義が事業の目的ならば正義を發表するに於て正義を維持するに於て最も力ありし事業こそ最も成功ありし事業なり、基督教の主義より云へば正義を成功と云ふ、正義を守るは成功せしなり、正義より戻る又正義より脱する(假令少しなりとも)之を失敗と云ふ、大廈空に聳へて高く、千百の青年其内に集り隆盛を極むるの學校事業必しも成功事業にあらざるなり、其資金の性質、其設立者の精神は其成功不成功の標準なり、仁政之を成功なる政事と云ふ、所謂政治家の術を學び、是と和し彼と戦い、是に媚び彼と絶ち、如何に外面上の國威を裝ふにもせよ之れ失敗せる政治なり、義人は信仰に依て生くべし、兵器軍艦増加せし故に成功せりと信ずる政治家、教場美麗にして生徒多きが故に成功せりと信ずる教育家、壯宏なる教會の建築竣て成功せりと信ずる牧師、帳面上洗禮を受けしものゝ増加せしを以て傳道事業の成功せしと信ずる宣教

師、——是等は皆肉眼を以て歩むものにして、信仰に依て生くるものにあらざるなり、玩弄物を玩ぶ小兒なり、木石を拜する偶像信者なり、黄土の堆積を樂む守錢奴なり、而して基督信者にはあらざるなり、聖アウガスチン曰く「大人の遊戲之を事業と云ふ」と、嗚呼余も余の事業を見る事小兒の玩弄物を見るが如くなりし、余は是に於て始めて基督の野の試の註解を得たり、馬太傳四章に曰く、

諸イエス聖靈に導かれ惡魔に試られん爲めに野に往けり、四十日四十夜食ふ事をせず後うゑたり、試むるものかれに來りて曰けるは爾もし神の子ならば命じて此石をパンと爲よ、イエス答けるは人はパンのみにて生るものにあらず唯神の口より出る凡の言に因ると錄されたり、是に於て惡魔彼を聖き京に携へゆき殿の頂上に立たせて曰けるは爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ蓋なんぢが爲に神その使等に命ぜん彼等手にて支へ爾が足の石に觸れざるようすべしと錄されたり、イエス彼に曰けるは主たる爾の神を試むべからずと亦錄せり、惡魔また彼を最高き山に携へゆき世界の諸國とその榮華とを見せて爾もし俯伏て我を拜せば此等を悉くなんぢに與ふべしと曰ふ、イエス彼に曰ひけるはサタンよ退け主たる爾の神を拜し惟之にのみ事ふべしと錄されたり、終に惡魔かれを離れ天使たち來り事ふ、

(一節より十一節まで)

基督已に歳とし三十に達し内に省み外に學び終に世の大救主たるを自覺するに至れり、彼の再從兄バプテスマのヨハネも彼に此天職あるを認め神の小羊として彼を公衆に紹介せり、皇天も彼の自覺とヨハネの見解とを確かめん爲めに聖靈を鳩の如く降して彼の上にやどらせり、然れども如何いかにして此世を救はん乎是基督を野に往かしめし問題なり、(馬可傳一章十二節「往かしめし」は英語の Driveth 希臘語の Ekballei「無理に逐ひやる」

の意なり)。

彼餓たり、而^{「かしてのち」}后世界億千萬の食足らずして饑餓に苦しむを推察せり、(醍醐天皇寒夜に衣を脱して民の疾苦を思ひし例を参考せよ)、基督思へらく「我は慈善家となりて貧民を救はん、我に土石を變じて「パン」となすの力あり、億萬の空腹立^{たちだて}所に充すべし」と、然れ共聖靈彼に告て曰く「饑餓を救ふは一時の慈善なり、爾の救世の事業は永遠にまで達すべきものなれば、億萬斤の「パン」と雖も決して爲し得べきものにあらざ、神の口より出づる凡ての言こそ眞正の「パン」なり、爾の天職は世の所謂慈善事業にあらざるなり」と。

慈善家たるの念を斷ち、彼一日聖殿^{みや}の頂上^{いたじき}に登り、眼下に萬人の群集^{みんしゅう}するを見し時、惡靈再び彼に耳語^{じご}して曰く「は爾の思想を是等の民に傳へんと欲す、然れども爾はナザレの一平民にして誰も爾の才力と眞價^{ちやうく}直^{ちよく}とを知るものなし、故に爾先づ己が身を下に投よさらば衆人爾の技倆に驚き爾に注目するに至らん、民の名望一たび爾の有^{いう}に歸せば彼らを感じ^{たふさ}する掌^{かへ}を反すより易し」と、然れ共天よりの聲は曰く「眞理は虚喝手段を以て傳へ得べきものにあらざ、民の名望に賴て彼等を教化せんとす是れ神を試み己を欺くなり、法便は救世術としては價値なきものなり」と。

基督は慈善家たらざるべし、彼は法便を使用し民の耳目を驚かして世を救はざるべし、然れ共彼一日高き山に登り、眼下に都府村落の散布せるを見、國土を神の樂園と爲し得べきを思ひしや、彼の胸中に浮びし救世の大方策は彼大政治家となりて社會改良^{とけ}を遂んとするにありき、彼思へらく、我に世界を統御するの才能あり、我一舉して羅馬人を放逐し、神の特種の撰擇にかゝる猶太人民を率ひ世界を化して一大共和國となし、仁を施し民を撫^ぶ

育し、眞正の地上の王國を建立せんと、然るに彼の良心は此の高尙なる希望をも彼に許さず、社會改良事業は正義堂々主義一步を譲らざるものゝ爲し遂げべきものにあらざ、必ず彼に伏し是を拜し、圓滑完滿の政略を取らざるを得ず、然り我は主義にのみ頼り救世の事業を實行せんのみ、サタンよ退け、汝の巧言を以て我を擾す勿れ、我は目前の救助は爲し得ずとも、我は國人の知る所とならず幽陰以て世を終るとも、私の事業は事物の上に現はれずとも、我は私の神を拜し惟之にのみ事ふべしと、基督の決心茲に於て定まり、生涯の行路彼に指示されたれば、惡魔は彼を説服するに由なく、終に彼を去りたれば天使來りて彼に事へたり。

基督の方向こゝに定まりて彼の生涯は實にこの決定の如くなりし、彼は衆人の饑餓を充たし得ざりしのみならず彼の死せんとするや彼の母さえも彼の弟子に依頼せざるを得ざるに至れり、天下の名望は一として彼に存するなく、彼は惡人として、神を瀆すものとして、刑罰に處せられたり、彼は一つの教會一つの學校をも建つる事なく、事業として見るべきものは僅に十三人の弟子養成のみなりき、然れども斯人こそ世界の救主にして神の獨子人類の王にあらずや、實に然り、靈魂を有する人類には事業に勝る事業あるなり、世の事業を以て汲々たる信者は宜しく事業上基督の失敗に注目せざるべからず。

若し基督にして慈善家たりしならば如何、ジョージ・ジューボデー (George Peabody) に勝り、スチブンス、ジラード (Stephen Girard) に勝り、百千萬の貧民孤兒は彼の施餓鬼に與かりしならん、然れ共「ヤコブの井戸の清水を飲むものはまた渴かむ」と、彼が曾てサマリヤの婦人に教へしごとく、彼が曾て五千人を一時に養ひし時多くの人は「パン」を得んが爲めに彼の跡に附き従ひし如く、永遠かわく事なき水、永遠餓がする事なき「パン」を

彼は此世に與へ得ざりしならん、世には貧民に衣食を給するに勝る大慈善あり、エモルソン氏曰く、

人もし我に衣食を給するも我は何時か之に充分なる報を爲さるべからず、(直接間接に)、我受けて後之に依て富まず貧ならず、只智識上並に道德上の補助は十全の利益なり。

しかのみならず

加之若し基督にして慈善家たりしならば彼の慈善は彼一代に止て萬世に至らざりしならん、視ずや彼の愛に勵まされて幾多の慈善家が彼の信徒の内に起りしを、ジョンハワード、サラマーチン、エリザベスフライ、の監獄改良事業は全く彼等が基督に對する報恩心より發せしものにあらずや、ウエルリヤム、ウエルバフホース

(William Wilberforce) 並にシヤフツベリー侯の慈善事業も亦然り、記者永く米國に在りて基督教國における慈善事業の盛なる實に東洋佛教國に於て豫想だもする能はざるを見たり、救靈上善行に價値を置かずして善行を勵ますに最も力ありしものは基督教なり、比較上現世は殆んど顧みるに足らざるものと見做して現世を救ひ進歩せしめしに於て最も功ありしものは基督教なり、基督若し慈善家たりしならば彼の慈善事業は知るべきのみ。

基督若し名望法便を利用して民を教化せしならば如何、基督教は永遠まで人靈を救ふの潛勢力を有する宗教にあらずして、佛教の今日あるが如く早や已に衰退時代に至りしならん、法便必しも明白なる虚言にあらず、然れ共基督の「否な否な然り然り」の大教理は法便てうものゝ功用を全く否定したり、基督信者にして高貴名望家に依て教理を傳へんとするもの、學識爵位を以て下民の尊敬を基督教に索がんとするもの、會堂の壯大を以て信徒を増加せんとするものは皆基督の第二の誘惑に陥りしものにして、法便を利用する淺薄なる佛教信徒と大差ある事なし、基督は法便を退けて彼の信者たるものに單純正直の眞價直を示せり、然るに彼の信者にしてその事業の

速成を願ひ塔の頂上より身を投ずる愚と不敬とを學ぶものあるは實に歎すべきにあらずや。

基督若し大政治家たりしならば如何、彼はシーザルに勝りシャーレマンに勝り、時の羅馬帝國を一統し、奴隸を廢し、税則を定め、堯舜ぎやうしゆんの世アウガスタスの黄金時代に勝る樂園國を地上に建てしならん、然れどもこれ彼の「否な否な然り然り」の直道を以て實行し得べきものにあらず、是と和し彼と戦ひ、軍略政策ふたつ兩ながら其宜しきを得ざれば到底爲し能はざりしならん、彼のビートル大帝は巨人なり、然れども誰か彼を以て君子仁人となすものあらんや、フレデリック大王も亦絶世の建國者なり、然れども誰か彼を以て人類の模範と見上るものあらんや、基督は萬世に至るまで此世を救ふべきものなれば彼は政治家たるべからざりしなり。

想ひ見る十六世紀の終に當て佛蘭西に内亂の起るや、王室は人民の多數と共に天主教を奉じ、加ふるにギース家の擧こぞつて之を贊助するあるを以て新教徒即ちヒューゲノー黨の苦戦止む時なく、前者に富と權力あり、後者に精神と熱心あり、この時に當てヒューゲノー黨の依て以て頼となせし唯一の人物はナバールの大公ヘンリーなりき、彼年とし若くして武勇に富み、而も佛王ルイ九世の正胤せいゐんにして王位を踐ふむべき充分の權利と資格とを有せり、然れ共彼プロテスタント教徒たるが故に此榮譽に達するを得ず、僅かに微弱なる反對黨の將となり、屢々忠實なる彼の小軍隊を以て敵の大軍を苦しめたり、彼は彼の黨を愛し、彼又彼の黨に愛せられたり、然るに一日彼は心中に思ひらく、「我此黨を率ひて全國に抗し戦亂止む時なく、國民塗炭に苦しむ茲に十數年、我の忠實なる兵卒にして我の爲めに屍かばねを戦場に曝さらせしもの其幾千なるを知らず、我何ぞ永く此悲劇を見るに忍びんや、我若し一步を讓れば我の血統我の名望必ず我をして佛國を統一せしむるに至らん、其時こそ我はヒューゲノー黨に信仰の自由

を與へ、舊新兩教徒を和合し、佛國をして強富幸福なる國民となし得べし、我何ぞ我國の爲め、我忠愛なる士卒の爲めに忍ばざらんや」と、歴史家は謂ふ佛國百年の計は實にヘンリーのこの決斷にかゝれりと。

而してナバールの大公は此誘惑に打負けたり、彼は佛國の爲め士卒の爲めに一步を譲り、天主教徒の請求を容れ、ヒューゲノー黨を脱し、羅馬法王に對し罪の懺悔を呈し、終に佛王として承認せらるゝに至れり、彼の讓退は彼の胸算に違はざる結果を生じ、彼の王位は強固となり、國內平穩に歸し民皆堵に就けり、彼は忠實なるヒューゲノー黨を忘れず、ナントの布令 (Edict of Nantes) に依て信仰自由を天下に令し新教徒をして政治上殆ど舊教徒と異なる處なからしめたり、彼の治世は佛國の中興として見るべきものなり、殖産事業の進歩、財政の整頓、外國に對する佛國の輝榮、共にヘンリー王の事跡として文明諸國の賞讃する處となれり、然れ共彼の佛國の爲めに盡せしは惟一時の治安策なりき、彼死するやリシユリヤ、マザリンの下に佛國は光威を歐洲に輝かせしも是皆外貌の虚飾にして内に留むべからざる腐敗の醸しつゝありしなり、ルイ十四世に至て此虚勢其極に達し、ルイ十五世は黄金珠玉に包まれながら不快淫風に沈みつゝ世を終れり、ルイ十六世に至り佛國革命起り次でナポレオンの世となり其慘怛たる光景は人の皆知る所なり、ヘンリーは一時を救はんとして毒を千載に流せり、嗚呼若し彼にして基督の如く惡魔の巧言を退けしならば佛國二百年間の爭鬭流血を避けしものを、ヘンリーは佛國を愛してこれ愛せざりしなり。

佛の大王ヘンリーに對して英の無冠王コロンウエルあり、彼も權力精神と相爭ふの時に生れ、身を民黨自由に委ね、英國民の全世界に對する天職を認め、十七世紀の始めに當て基督の王國を地上に來らさんとの大理想を實

行せんとせり、百難起て彼の進路を妨ぐると雖も彼の確信は毫も動くことなく、終に龐粗ながらも英國をして公義と平等とに基する共和國となすに至れり、然れ共英國國民は未だ悉く無冠王の大理想を有せず、彼の心靈的の政治は肉慾的の普通社會を歡ばさず、反對終に四方に起り彼は單獨白殿に無限の神をのみ友とするに至れり、然れ共彼の理想と信仰とは確固として動かず、彼は彼の事業の永續すべからざるを知ると雖も尚ほ彼の最初の理想に向て進み、内亂再起の徴あるをも顧みず、彼の勝算全く絶へしにも關せず、終生一主義を貫徹して死せり、彼が世を去るや彼の政府は直ちに轉覆され、彼の屍は發かれ、彼の名は賤められ、彼の事業は一つとして跡を留めざるが如きに至れり、世はチャレス二世の柔弱淫縱腐敗の世となり、バトラー、ドライデン、クラレンドンの如き狐狸の輩寵遇を受け、ハムブデンもベーンも無冠王も曾て地上の空氣を呼吸せし事なきやの感を起さしめたり、小人は皆云へり清黨の事業は全く失敗なりしと、然れど共無冠王死して三十年、彼の石碑に未だ青苔だも生ぜざる時に、スチュアート家は全く跡を絶つに至り、爾來眞理と自由とが地球運轉の度數と共に増進するや、無冠王の理想は徐々に實成しつゝあるなり、コロムウエルありしが故に英國に十八世期の革命なかりしなり、佛王ヘンリーの讓退は佛國民一百年間の墮落と流血とを招き、コロムウエルありしが故に英國國民は他歐洲國民に先つ百年已に健全なる憲法的自由を有せり、コロムウエルは實に英國を愛せし人なり。

楠正成の湊川に於ける戰死は決して權助の縊死にあらざりしなり（福澤先生明治初年頃の批評）、南朝は彼の戰死に由て再び起つべからざるに至れり、彼の事業は失敗せり、然れども碧血痕化五百歳の後、徳川時代の末期に至て、蒲生君平高山彦九郎の輩をして皇室の衰頽を歎ぜしめ勤王の大義を天下に唱へしむるに於て最も力あり

しものは嗚呼夫れ忠臣楠氏の事跡にあらずして何ぞや、ボヘミヤのハツス將に燒殺せられんとするや大聲呼で曰く「我死する後千百のハツス起らん」と、一楠氏死して、慶應明治の維新に百千の楠公起れり、楠公實に七度人間に生れて國賊を滅せり、楠公は失敗せざりしなり。

基督の十字架上の耻辱は實に永遠に迄互る基督教凱陣の原動力なり、基督の失敗は實に基督教の成功なりしなり。

然らば余も失敗せしとて何ぞ落膽すべき、何ぞ失敗せしを感謝せざる、義の爲めに失敗せしものは義の王國の土臺石となりしものなり、後進者成功の爲めに貯へられたる潛勢力なり、我等は后世の爲めに善力 (Power for Good) を貯蓄しつゝあるなり、余は先祖の功に依り安逸衣食する貴族とならんよりは功を子孫に遺す殉義者とならんことを欲す。

然らば余は余の事業に失敗せしにより絶望家となり、事業家たるの念を斷ちしや。

否然らざるなり、余は今は眞正の事業家となりしなり、事業とは形體的のものなりとの迷信全く排除せられてより余は動くべからざる土臺の上に余の事業を建設し始めたり、余の事業の敗られしは敗るべからざる事業に余の着手せんが爲めなり (希伯來書十二章第二十七節)。事業は精神の花なり、果なり、精神より自然に發生せざる事業は事業にして事業にあらずるなり、爾曹まづ神の國と其義とを求めよ然らば事業も自然に爾曹より來るべし。

第四章 事業に失敗せし時 現代語訳

キリスト教は人を真面目な気持ちにさせるものである。青年はこれによって既に分別のある年長者のような考え方をもち、少女はこれによって既に老婦人のような細やかな配慮を持つ。それは、キリスト教が物事の本質を求めさせ、うわべだけのものを軽んじさせるからである。小説を読むことや芝居を観ることは、歴史の研究や社会の観察へと変わり、野心的な名声欲は、落ち着いた事業の計画へと変わり、自己を尊大に思う気持ちは公益増進への希望へと変化し、「いかにしてこの国とこの神に奉仕しようか」という問題について昼夜深く考えるようになる。

私がまだ子どもだった頃、子どもじみた遊びは

私にとって楽しいものではありませんでした。

私の心は真剣に学び、知り、そしてそこから

公共の利益となることをしようと決意していました。

私はそのために生まれてきたのだと思っていました。——ミルトン『復樂園』

事業への意欲を呼び起こさせる宗教はキリスト教である。事業と宗教とは、本来その性質が異なっているという認識は、一般の人々が抱いている考えである。事業とは活発な活動を意味するものとされ、宗教とは清らかで静かに世を避けることを言うものとされているようである。私たちが仏教の熱心な信者で、教えのために大きな

事業を企てた人がいると聞いたことはまだない。釈迦の理想とする人物は、決して事業家ではなかったのである。しかし、キリスト教の特長として、世の事業を重んじるだけでなく、それを信じる人々に偉大な事業家となることへの尊い希望を抱かせる。カーライルの言う「農聖人」、すなわち手には鋤を取りながらも心には宇宙の大きな真理を蓄えている人が、キリストが理想とする人物であり、キリスト自身もまた、ひっそりとした村ナザレの職人であつたのである。

私もキリスト信徒となつてから、芝居も寄席も競馬も花札のような遊びもすべて、以前からの楽しみを捨てた。ただ事業という思いだけが頻繁に胸中に湧き上がり、ほとんど抑えきれないほどになった。ある時には、スコットランドのリビングストーンに倣い、「私利私欲のために商人が通り抜けられる場所に、どうしてキリストの愛に励まされた宣教師が通り抜けられないという道理があるだろうか」と言いながらアフリカ大陸を横断したように、私もまた新しい信仰の感動のもと、南洋あるいは北海の無人の土地を探索しようかと考える。ある時には、ドイツのシュヴァルツに倣い、未開の国の指導者となり、仁愛を基礎としてその国の基本方針を定めようかと考える。ある時には、イギリスのウィリアム・ベンに倣い、荒れた土地を開拓し未開の民と和解し、純粋な君子国を深い森と広い野原の中に築こうかと考える。ある時には、アメリカのビーボデーに倣い、貧しさから身を起こして巨万の富を築き、孤児を養い未亡人を慰め、大きな慈善の功績を挙げようかと考える。「キリスト教に世俗の快樂はない」などと言うのは止めよ。この希望、この計画——ああ、本当に私は自分の人生が短いことを嘆いた。事業、事業、国のため、神のための事業。——ああ、世で快樂と呼ぶもののうちに、何がこの快樂に勝るものがあるだ

ろうか。

私はかつてこう思っていた。自分のために富と名誉を祈ることは罪であり、神は決してそのような祈りは聞き入れないだろうと。名誉を得るための祈祷もまた同じである。しかし、他の人を助けようと祈ることは神が最も喜ばれることであり、このような祈りは必ず聞き届けられ、私の事業は必ず成功に至るだろうと。それゆえに、他のことは全て投げ打ち、私の神聖な希望を叶えることに努めた。勿論、キリストの信徒として、私が世間に媚びたり、権力者にへつらったりして目的を達成すべきではない。私が頼るべきは神であり、正義である。「ある者は車に頼り、ある者は馬に頼る。しかし私たちは私たちの神エホバの名を唱える」のである。

この時こそ本当に私にとっては最も希望に満ち、最も楽しい時であった。私の前途に邪魔するものなどなく、私の心の中に「失敗」という文字は存在しない。私は宇宙の神を信じ、全ての人々のために大きな事業を成し遂げようと願う。成功は必然である。神が存在する限り、私の事業が成功しない理由はない。見よ、世の事業家が失敗するのは、自分の利益のために計画し、栄光ある神を信じないからである。私はそうではない。私の事業は公益のため、神のためである。もし私が失敗するならば、それは神が存在しないことになり、正しい道理は誤りとなる。・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

然るに私の愛する読者よ、私は失敗した。数年間の計画と祈祷は、実現しない夢に終わった。そして、私の失

敗から生じた被害は私一人の身に留まらず、私の保護のもとにある忠実な妻、勤勉な母の上にも降りかかった。私は世間の嘲笑を浴びた。友人は私の不注意を責め、私の敵は私の不幸を喜んだ。悪霊はこの機に乗じて私に囁き、こう言った。「お前は愚かな者よ、方策が事業成功の秘訣であることを知らないのか。精神の力だけで事業を成し遂げられるとひたすらに思い込んだ幼い心はあわれである。ある偉大な事業家を見よ。彼は学校を設立するにあたり、広く世の賛同を求め、少々良心に恥じる点があったとしても、数多くの後進を助けることと思えば、意向を曲げ頭を下げ、莫大な資金を集めることができたではないか。『摂理は常に強力な軍隊と共に存在する』というナポレオン一世の言葉は、本当に事業家の標語であるべきものである。見よ、ある牧師は常に正義と公の道の利益を説くとはいえ、彼自身が教会を新築し教えを広めようとする時には、必ず世間一般の方法を取るのではないか。正義と公の道とは、天使の国においては実際に実行されるべきであるけれども、この人間世界においては、多少の方策と混ぜ合わせるものでなければ決して実行できるものではない。お前は今日から少し大人らしくなれ。真理だとか愛国だとか言うことは控えめにせよ。そうでなければお前自身が失敗に失敗を重ねるだけでなく、罪のないお前の妻や子、父母もお前と共に悲しみの中に一生を送らざるを得ない。そしてまた、お前が助けようとする公衆も、お前の方法を改めるのでなければお前から助けを得ることはない。お前はどうして国のため、お前の愛する妻子のために辛抱しないのか。神はお前から無理な要求はされない。方策は今の世に必要なものである。方策と嘘とはそれ自体異なる点がある。お前は理解したか、否か」と。

ああ、誰がこの巧みな議論に反論できるだろうか。事実 is 確かな結論をもたらすものである。私は経験によっ

て、正義と公の道が無力であることを知った。悪霊の主張は、これこそ天からの声ではないだろうか。私たちは経験によってのみ物事の本当の姿を知ることができるのである。そして、私の経験は私の希望とは裏腹であった。「過ちを犯してしまったら、それを改めることをためらうな」という。どうして公平な学者として、勇氣ある男子として、今日までの迷信から脱却し、国のため神のため、少し方策を利用して以前の失敗を取り戻さないでいられようか。

その時、声が内から聞こえた。その響きの奥深さは、永遠から響いてくるようであり、その威力は宇宙の支配者の声であるかのようなのである。私の全身を震わせ、こう言った。「正義は正義である」と。その後は静寂に包まれた。

ああ、どうすればよいのだろうか。誰がこの声に逆らうことができるだろうか。それならば、倒れることになろうとも正義を守れということだろうか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、私は悟った。私の神よ、正義は事業よりも偉大なものである。いや、そうではない。正義は大事業であり、正義を守ることに勝る大事業はないのである。人生の目的は事業ではない。事業は正義に到達するための道であり、正義は事業の召使いではない。教会も学校も政治も産業も、正義を学びこれに到達するための手段である。現世における事業の目的は事業そのもののためではなく、これに携わる者がこれによって得る経験、鍛錬、忍耐、愛の心にあるのである。キリスト教は事業よりも精神を尊ぶものである。それは精神は死後永遠まで存在

し、事業は現世と共に消滅するものであるからである。ある中国の宣教師は四十年間伝道に従事し、一人の信徒も得なかった。けれども、喜びをもつてこの世を去った。彼は何も得なかったのだろうか。いや、そうではない。師父ザビエルは東洋で百万人以上に洗礼を施したといえども、おそらく現世から得た本当の結果においては、この無名の一宣教師には及ばなかっただろう。ああ事業よ、事業よ、どれほどの偽善と卑劣な手段と嫉妬と争いが、お前の名によって引き起こされてきたのだろうか。

ああ、そうであるか。それならば、私が失敗したことは必ずしも私の罪ではない。また、神が私を見捨てられた証拠でもない。また、私の懸命な努力や祈禱が無益であることを示すものでもないのである。そうである。もし正義が事業の目的ならば、正義を表明することにおいて、正義を維持することにおいて最も力があつた事業こそ、最も成功した事業である。キリスト教の主義から言えば、正義こそが成功であると言う。正義を守ることが、これ成功したことである。正義から外れること、また正義から逸脱すること（たとえわずかであつても）、これを失敗と言う。大きな建物が空高くそびえ立ち、千百の青年がその中に集まり大いに栄える学校事業も、必ずしも成功事業ではない。その資金の性質、その設立者の精神こそ、その成功不成功を決める基準である。仁政をもつて、これを成功した政治と言う。いわゆる政治家の駆け引きを学び、これと和解し彼と戦い、これに媚び彼と断絶し、いかにうわべだけの国威を装おうとも、これは失敗した政治である。正しい人は信仰によつて生きるべきである。兵器や軍艦が増加したから成功したと信じる政治家、校舎が立派で生徒が多いから成功したと信じる教育家、壮大な教会の建物が完成して成功したと信じる牧師、帳簿上で洗礼を受けた人が増加したことをもつて伝

道事業が成功したと信じる宣教師、——これらは皆、目に見えるものだけを頼りに生きる者であって、信仰によって生きる者ではない。これらは皆、おもちゃで遊ぶ小さな子どもである。木や石を拝む偶像信者であり、黄金の山を楽しむ守銭奴である。そして、キリストの信者ではないのである。聖アウグスティヌスは言った。「大人の遊び、これを事業と言う」と。ああ、私も私の事業を見ることが小さな子どものおもちゃを見るかのようになった。私はここにおいて初めてキリストの荒野での試練の解釈を得た。マタイ伝四章にはこう記されている。

それからイエスは、悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして四十日四十夜、断食をし、その後で空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」イエスは答えられた。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」と書いてある。」すると悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げなさい。『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」イエスは言われた。『『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。』悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」そこでイエスは言われた。「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れた。そして、見よ、御使いたちが近づいて来てイエスに仕えた。

(二節より十一節まで)

キリストは既に三十歳に達し、内省し外から学び、ついに世の大いなる救い主であることを自覚するに至った。彼のまたいところである洗礼者ヨハネも、彼にこの天職があることを認め、神の子羊として彼を公衆に紹介した。天もまた、彼の自覚とヨハネの見解とを確かなものにするために、聖霊を鳩のように降らせて彼の上に宿らせた。しかし、いかにしてこの世を救おうか、これがキリストを荒野へ行かせた問題である。

彼は飢えた。そして、世界中の何億何千万人もの食料が足りず、飢餓に苦しむことを推察した。キリストはこう思った。「私は慈善家となって貧しい人々を救おう。私には土や石を『パン』に変える力があり、何億という空腹をたちどころに満たすことができるだろう」と。しかし聖霊は彼に告げて言った。「飢餓を救うのは一時的な慈善である。あなたの救世の事業は永遠にまで達するべきものであるから、どれほどの『パン』といえども、決して成し遂げられるものではない。神の口から出る全ての言葉こそ、真の『パン』である。あなたの天職は、世で言う慈善事業ではない」と。

慈善家であるという考えを断ち切り、彼がある日、宮殿の屋根の上に登り、眼下に多くの人々が集まっているのを見た時、悪霊は再び彼に囁き、こう言った。「あなたは自分の思想をこれらの民に伝えたいと望む。しかしあなたはナザレの一平民であって、誰もあなたの才能と真の価値を直接知る者はいない。ゆえに、あなたはまず自分の身を下に投げよ。そうすれば、群衆はあなたの技量に驚き、あなたに注目するようになるだろう。人々の評判が一度あなたのものとなれば、彼らを感化するのは手のひらを返すより容易である」と。しかし天からの声は

言った。「真理は虚飾の手段をもって伝えられるべきものではない。人々の評判に頼って彼らを教え導こうとするのは、神を試し、自らを欺くことである。方策は救世の手段としては価値のないものである」と。

キリストは慈善家であるべきではない。彼は方策を使用し、人々の耳目を驚かせて世を救うべきではない。しかし、彼がある日高い山に登り、眼下に都市や村落が点在するのを見て、国土を神の楽園とすることができると悟った。彼の胸中に浮かんた救世の大きな方策は、彼が大政治家となって社会改良を成し遂げようとするにあった。彼はこう思った。私には世界を統治する才能がある。私は一挙にしてローマ人を追放し、神に特別に選ばれたユダヤ人民を率いて世界を一つの大きな共和国に変え、仁愛を施し民を慈しみ育み、真の地上の王国を建設しよう。然るに彼の良心はこの崇高な希望をも彼に許さなかった。社会改良事業は、正義を堂々と掲げ、主義を一步も譲らない者が成し遂げられるものではない。必ず彼は悪魔にひれ伏しこれを拝み、円滑で完璧な政略を取らざるを得ない。然り、私は主義にのみ頼り、救世の事業を実行するだけである。サタンよ、退け。お前の巧みな言葉をもって私を乱すな。私は目の前の救助はできなくとも、私は国人に知られることなく、ひっそりと世を終えることになるうとも、私の事業が目に見える形となって現れずとも、私は私の神を拝し、ただこれにのみ仕えるべきであると。キリストの決心はここに定まり、生涯の道筋が彼に示されたので、悪魔は彼を説得する手立てがなく、ついに彼を去り、天使が来て彼に仕えた。

キリストの方向性はここに定まり、彼の生涯は本当にこの決定の通りとなった。彼は多くの人々の飢餓を満たすことができなかっただけでなく、彼が死に瀕した時、彼の母でさえ彼の弟子に頼らざるを得ない事態に至った。

世間の名声は一つとして彼にあることはなく、彼は悪人として、神を冒瀆する者として、刑罰に処せられた。彼
は一つの教会、一つの学校も建てることはなく、事業として見るべきものはわずか十二、三人の弟子を育てたこ
とのみであった。しかれども、この人こそ世界の救い主にして神の独り子、人類の王ではないか。本当にそうで
ある。魂を持つ人類には、事業に勝る事業があるのである。世の事業をもつて多忙にしている信徒は、事業上に
おけるキリストの失敗に注目すべきである。

もしキリストが慈善家であつたならばどうだろうか。ジョージ・ピーボデーやスティーブン・ジラードに勝り、
百千万の貧しい人々や孤児は彼の施しにあずかつたであろう。しかし「ヤコブの井戸の清い水を飲む者はまた渴
く」と、彼がかつてサマリアの女性に教えたように、彼がかつて五千人を一度に養つた時、多くの人が「パン」
を得るために彼の後を追つたように、永遠に渴くことのない水、永遠に飢えることのない「パン」を、彼はこ
世に与えることができなかったであろう。世には貧しい人々に衣食を与えることに勝る大きな慈善がある。エマ
ーソン氏はこう述べている。

人がもし私に衣食を施しても、私はいつかこれに充分な報いをしなければならぬ（直接的、間接的に）。私
がそれを受け取つても、それによつて富むことも貧しくなることもない。ただ知識上並びに道徳上の援助は
完全な利益である。

それに加えて、もしキリストが慈善家であつたならば、彼の慈善は彼一代で終わり、後世には伝わらなかつた
であらう。見よ、彼の愛に励まされてどれほどの慈善家が彼の信徒の中から現れたことか。ジョン・ハワード、

サラ・マーチン、そしてエリザベス・フライが行った監獄改良事業は、ひとえにキリストの恵みに対する感謝の念から発したものである。ウィリアム・ウイルバーフォース並びにシャフツベリー侯の慈善事業もまたそうである。記者は長く米国に滞在し、キリスト教国における慈善事業の盛んな様子は、本当に東洋の仏教国においては想像だにできないほどであると見た。魂を救う上で善行に価値を置かずして善行を励ますことに最も力があつたものはキリスト教である。比較の上では現世はほとんど顧みるに足らないものと見做しながら、現世を救い進歩させることに最も功があつたものもキリスト教である。キリストがもし慈善家であつたならば、彼の慈善事業はその範囲が限定されていたであろうことは明らかである。

もしキリストが名声や方策を利用して民を教化したならばどうであろうか。キリスト教は永遠にまで人々の魂を救う潜在的な力を持つ宗教ではなく、仏教が今日あるように、既に衰退時代に至つていたであろう。方策は必ずしも明白な嘘ではない。しかしキリストの「否は否、然りは然り」という大きな教えは、方策というものとの効用を完全に否定した。キリスト信者にして高貴な名望家によつて教えを伝えようとする者、学識や爵位をもつて下々の民の尊敬をキリスト教に結びつけようとする者、教会の壮大さをもつて信徒を増やそうとする者は、皆キリストの第二の誘惑に陥つた者であり、方策を利用する浅薄な仏教信徒と大きな違いはない。キリストは方策を退け、彼の信者である者に純粹で正直な真の価値を示した。しかし、キリストを信じている者なのに、その事業が早く完成することを願い、塔の頂上から身を投げるといふ愚かな行為と、神に対する無礼な態度を真似る者が出るのは、実に嘆かわしいことではないか。

キリストがもし大政治家であつたならばどうであらうか。彼はシーザーに勝り、カール大帝に勝り、当時のローマ帝国を統一し、奴隸制度を廃止し、税の規則を定め、堯舜ぎょうしんの世やアウグストゥスの黄金時代に勝る樂園の国を地上に築いたであらう。しかしこれは彼の「否は否、然りは然り」というまっすぐな道をもつて実行できるものではない。これと和解し彼と戦い、軍略と政策の両方が適切でなければ、到底成し遂げられなかつたであらう。ピョートル大帝は偉大な人物である。しかし誰が彼を君子や仁者とするだらうか。フリードリヒ大王もまた絶世の建国者である。しかし誰が彼を人類の模範と見上げるだらうか。キリストは永遠にまでこの世を救うべきものであるから、彼は政治家であるべきではなかつたのである。

想像する。十六世紀の終わりにフランスで内乱が起つた際、王室は国民の多数と共にカトリック教を奉じ、加えてギーズ家が挙こぞつてこれを支持したため、新教徒すなわちユグノー党の苦戦は止む時がなく、前者には富と権力があり、後者には精神と熱心があつた。この時、ユグノー党が唯一頼りにした人物はナバールの大公アンリであつた。彼は若くして武勇に富み、しかもフランス王ルイ九世の正当な血筋にして王位に就くべき十分な権利と資格とを有していた。しかし彼がプロテスタント教徒であつた故にこの榮譽に達することができず、わずかに微弱な反対党の将となり、しばしば忠実な彼の小軍隊をもつて敵の大軍を苦しめた。彼は彼の党を愛し、彼もまた彼の党に愛された。然るに、ある日彼は心中にこう思った。「私はこの党を率いて全国に抗し、戦乱止む時なく、国民がひどい苦しみにあえぐこと既に十数年、私の忠実な兵卒にして私のために屍を戦場に晒した者はどれほどになるか分らない。私はどうして永くこの悲劇を見るに耐えられるだらうか。私がもし一步を譲れば、私の血

統と私の名声は必ず私をフランスの統一に至らせるだろう。その時こそ私はユグノー党に信仰の自由を与え、旧教徒と新教徒を和合させ、フランスを強く豊かで幸福な国民とすることが出来るだろう。私はどうして我が国のため、私の愛する士卒のために我慢しないことがあろうか」と。歴史家は言う、フランス百年の計は本当にアンリのこの決断にかかっていたと。

そしてナバールの大公は、この誘惑に打ち負けた。彼はフランスのため、士卒のために一步を譲り、カトリック教徒の要求を受け入れ、ユグノー党を離脱し、ローマ法王に対し罪の懺悔を呈し、ついにフランス王として認められるに至った。彼の譲歩は彼の計画通りの結果を生み、彼の王位は強固となり、国内は平穏に帰し民は皆平穏な生活を送った。彼は忠実なユグノー党を忘れず、ナントの布令によって信仰の自由を天下に発令し、新教徒をして政治上ほとんど旧教徒と異なる点がないようにさせた。彼の治世はフランスの中興として見るべきものであり、殖産事業の進歩、財政の整頓、外国に対するフランスの輝かしい榮譽は、共にアンリ王の事績として文明諸国の賞賛するところとなった。しかし彼のフランスのために尽くしたことは、ただ一時の治安策にすぎなかった。彼が死ぬと、リシユリューやマザランの下でフランスはヨーロッパに光威を輝かせたが、これらは全て外面の虚飾にして内に留まらない腐敗を醸しつつあったのである。ルイ十四世に至りこの虚勢はその極に達し、ルイ十五世は黄金や珠玉に包まれながら不快な淫風に沈みつつ世を終えた。ルイ十六世に至りフランス革命が起こり、次いでナポレオンの世となり、その悲惨な光景は皆が知るところである。アンリは一時を救おうとして毒を千載に流した。ああ、もし彼がキリストのように悪魔の巧言を退けていたならば、フランスは二百年間の争闘と流血

を避けられたものを。アンリはフランスを愛したのだが、これ（真の愛）を愛さなかったのである。

フランスの大王アンリに対してイギリスの無冠の王クロムウェルがいる。彼も権力と精神が相争う時代に生まれ、自らを平民党の自由（の精神）に委ね、イギリス国民の全世界に対する天職を認め、十七世紀の初めにキリストの王国を地上に來たらせようとの大きな理想を實行しようとした。百の困難が起きて彼の進路を妨げたとはいえ、彼の確信は少しも揺るぐことなく、ついに粗々^{そそ}としながらもイギリスを公の正義と平等とに基づく共和国とするに至った。しかしイギリス国民はまだ全てが無冠の王の大きな理想を有していたわけではなく、彼の心靈的な政治は世俗的な普通の社会を喜ばせなかった。反対はついに四方に起こり、彼は孤立しホワイトホールに無限の神のみを友とするに至った。しかし彼の理想と信仰とは確固として動かず、彼は彼の事業が長く続かないことを知っていたとはいえ、なお彼の最初の理想に向かって進み、内乱再起の兆候があることも顧みず、彼の勝算が全く絶えていたにも関わらず、終生一つの主義を貫徹して死んだ。彼が世を去ると、彼の政府は直ちに転覆され、彼の屍は暴かれ、彼の名は卑しめられ、彼の事業は一つとして跡を留めないかのようになった。世はチャールズ二世の柔弱、淫縦、腐敗の世となり、バトラー、ドライデン、クラレンドンのような狡猾な者たちが寵遇を受け、ハンブデンもベーンも無冠の王（クロムウェル）もかつてこの世に存在したことがないかのような感じを起こさせた。取るに足らない人々は皆言った、清教徒の事業は完全に失敗であったと。しかし、無冠の王が死んで三十年、彼の石碑にまだ青苔さえ生えていない時に、ステュアート家は全く跡を絶つに至り、その後真理と自由とが地球の回転と共に増進するにつれて、無冠の王の理想は徐々に実現しつつあるのである。クロムウェルがい

た故にイギリスに十八世紀の革命はなかったのである。フランス王アンリの譲歩はフランス国民の百年間における墮落と流血を招き、クロムウェルがいた故にイギリス国民は他のヨーロッパ国民に先立つこと百年も既に健全な憲法的自由を有した。クロムウェルは本当にイギリスを愛した人である。

楠木正成の湊川における戦死は、決して役に立たない者の縊死ではなかったのである。南朝は彼の戦死によって再び立ち上がることができなくなった。彼の事業は失敗した。しかれども、忠臣の血の痕となって五百年後の、徳川時代の末期に至り、蒲生君平や高山彦九郎といった人々をして皇室の衰退を嘆かせ、勤王の大義を世に唱えさせるにあたつて最も力があつたものは、ああ、それは忠臣楠氏の事績でなくて何であろうか。ボヘミアのフスが今にも焼き殺されようとするや、大声で叫んで言った。「私が死んだ後、千百のフスが起ころう」と。一人の楠氏が死んで、慶応・明治の維新に百千の楠公が起こつた。楠公は本当に七度人間に生まれて国賊を滅したのである。楠公は失敗しなかつたのである。

キリストの十字架上の恥辱は、本当に永遠にまでわたるキリスト教勝利の原動力である。キリストの失敗は、本当にキリスト教の成功であつたのである。

そうであるならば、私も失敗したからといってどうして落胆すべきだろうか。どうして失敗したことを感謝しないことがあるか。義のために失敗したものは、義の王国の土台石となつたのである。後進者が成功するため蓄えられた潜在的な力である。私たちは後世のために善の力を貯蓄しつつあるのである。私は先祖の功績により安穩に衣食する貴族となるよりは、功績を子孫に残す殉義者（正義のために身を捧げる者）となることを望む。

そうであるならば、私は私の事業に失敗したことにより絶望家となり、事業家であるという思いを断ち切ったのだろうか。いや、そうではない。私は今は真正の事業家となったのである。事業とは形のあるものであるという迷信が完全に排除されてから、私は動くことのない土台の上に私の事業を建設し始めた。私の事業が破られたのは、破られることのない事業に私が着手しようとするためである。事業は精神の花であり実である。精神から自然に発生しない事業は、事業であって事業ではないのである。あなたたちはまず神の国とその義とを求めよ。そうすれば事業も自然にあなたたちよりもたらされるであらう。